日蓮大聖人御書全集

弥源太殿御返事

やげんたどのごへんじ

新版
1698
〜
1700

弥源太殿御返事

文永11年('74) 2月21日　53歳　北条弥源太

そもそも、日蓮は日本第一の僻人なり。その故は、皆人の父母よりもたかく主君よりも大事におもわれ候ところの阿弥陀仏・大日如来・薬師等を御信用ある故に三災七難先代にこえ天変地夭等昔にもすぎたりと申す故に、結句は今生には身をほろぼし国をそこない後生には大阿鼻地獄に堕ち給うべしと一日片時もたゆむことなくよばわりし故に、かかる大難にあえり。譬えば、夏の虫の火にとびくばり、

鼠猫前

ねずみがねこのまえに出でたるがごとし。これあに我が身を知って用心せざる畜生のごとくにあらずや。身命を失うこと、しかしながら心より出ずれば僻人なり。

ただし、石は玉をふくむ故にくだかれ、鹿は皮肉の故に殺され、魚はあじわいある故にとらる、すいは羽ある故にやぶらる、女人はみめかたちよければ必ずねたまる、この意なるべきか。日蓮は法華経の行者なる故に、三類の強敵あって種々の大難にあえり。しかるに、かかる者の弟子檀那とならせ給うこと不思議なり。定めて子細候らん。相構え

て、能く能く御信心候いて、霊山浄土へまいり給え。

また、御祈禱のために、御太刀、同じく刀、あわせて二つ送り給わって候。この太刀は、しかるべきかじ作り候かと覚え候。あまくに、あるいは鬼きり、あるいはやつるぎ、異朝にはかんしょう・ばくやが剣に、いかでかことなるべきや。これを法華経にまいらせ給う。殿の御もちの時は悪の刀、今、仏前へまいりぬれば善の刀なるべし。譬えば、鬼の道心をおこしたらんがごとし。あら不思議や、不思議や。後生にはこの刀をつえとたのみ給うべし。

法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし。ただし、日蓮をつえはしらともたのみ給うべし。けわしき山、あしき道、つえをつきぬればたおれず。殊に手をひかれぬれば転まろぶことなし。南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえ柱はしらとなり給え。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給うべし。日蓮さきに立ち候わば、御迎えにまいり候ことやあらんずらん。またさきに行かせ給わば、日蓮必ず閻魔法王にも委しく申すべく候。このこと少しもそら事あるべからず。日蓮、法華経の文のごとくならば、

通塞の案内者なり。ただ一心に信心おわして霊山を期し給え。ぜにというものは用にしたがって変ずるなり。法華経もまたまたかくのごとし。やみには灯となり、渡りには舟となり、あるいは水ともなり、あるいは火ともなり給うなり。もししからば、法華経は「現世安穏、後生善処」の御経なり。

その上、日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて彼の国は天照太神のすみそめ給いし国なりといえり。かしこにして、日本国をさぐり出だし給うあわの国御くりやな

り。しかもこの国の一切衆生の慈父・悲母なり。かかるいみじき国なれば、定めて故ぞ候らん。いかなる宿習にてや候らん、日蓮また彼の国に生まれたり。第一の果報なるなり。この消息の詮にあらざれば、委しくはかかず。ただ、おしはかり給うべし。

能く能く諸天にいのり申すべし。信心にあかなくして、所願を成就し給え。女房にもよくよくかたらせ給え。

恐々謹言。

二月二十一日

日蓮　花押

弥源太殿御返事

やげんたどのごへんじ